

# OMU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OMU students

## プロフィール (Profile)

氏名：細川美侑  
所属：医学部 医学科  
学年：3年

留学先：ケニア・ビクトリア湖島嶼におけるマラリア撲滅研究アドベンチャー

留学期間：2022/9/20~2022/10/20

記入日：2022/10/30

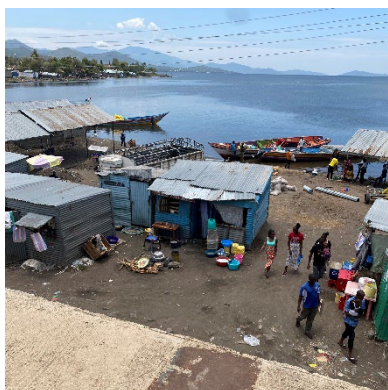
## 留学レポート Study Abroad Report

### 【留学の経緯】

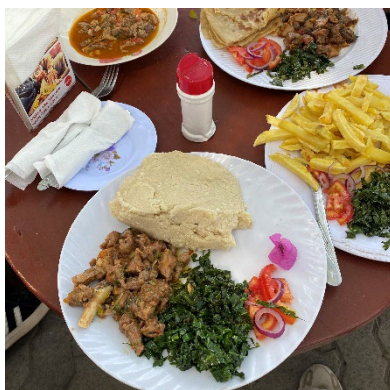
私がケニアへ渡航したのは留学プロジェクトへの参加ではなく、医学科の実習としてです。医学部医学科のカリキュラムでは3年生の9月から11月にかけて研究室に配属されるという実習があり、寄生虫学教室に入ると、ケニアでのフィールドワークに参加するという選択肢があります。ケニアでマラリアに関する調査・研究を行っている先生がいらっしゃるの、現地で見させて頂く形です。最初は海外に行けるという理由で興味を持ったのですが、寄生虫学の講義を受けるとその奥深さや複雑さがとても面白く、そして何よりも寄生虫学の先生が素敵な方ばかりでとても雰囲気の良い教室だったので、ここを選び、ケニアに行くことを決めました。

### 【滞在場所】

マラリア調査のために滞在していたのは、ケニアの首都ナイロビから飛行機1時間+車3時間かけていったところのビタという、小さいけれど活気にあふれて賑やかな町です。ビクトリア湖に面していて、漁業はもちろん、洗濯やシャワー、食器洗いなど湖は人々の生活の一部となっています。そこで研究をしている寄生虫学教室の先生が現地に家を持ち、住んでいるので、レストランや市場など様々な場所に連れていってくださりました。日本と違うのは、まずは物価が安いところです。水はペットボトル1本30円弱、食事は一食200円程です。ナイロビは日本とあまり物価が変わらないので、同じ国内でも地域による差が激しくなっています。道路は中心の大きな道から逸れると舗装のされていない土道で、牛・ヤギ・ロバ・ニワトリ・犬がその辺をウロチョロしています。ロバが荷物を乗せた台車を引っ張りながら、単独で歩いている光景に驚きました。個人的に面白かったのが、教会が日本のコンビニと同じくらいの頻度であることです。その見た目は教会というよりは、日本人の感覚で言えば小屋のような感じで、ほとんどいつでも大音量で歌や演説が聞こえてきます。最初の一週間は一晚中聞こえてくる教会からの音で中々眠れず、睡眠不足が続きました。でもまあ少しすればBGMかのような感覚で過ごせるように、笑



湖沿いの場所で、人々が洗濯や洗い物をしに集まります。



食事は美味しいですが、基本的に味と組み合わせはほぼ同じです。



1か月お世話になったホテルの方たち！みんな優しい！

### 【現地での活動】

今回参加したのは、現地の小学校をまわってマラリアに関する調査のために採血をするフィールドワークです。マラリアは赤血球に感染するため、研究のために1人1人指から血をとっていく必要があります。このスクールサーベイで得られた検体は、研究室の複数のプロジェクトに用いられています。手伝いとして短期バイトのような形で集められた現地の人たちと一緒に、1日に2グループに分かれてそれぞれ1校ずつ調査に行きます。早いときは朝の6時に出発し、2〜3時間ほど車で行く



日もありました。訪れた小学校はすべて自然に囲まれていて、グラウンドには大きい木や石がたくさんあります。到着してすぐに木の陰に資材をセッティングし、1日に150人ほど順番に体温・体重・身長・脾腫の確認をして、最後に採血を行います。

子どもたちはとても元気で、黒人でない私たちが珍しいのか周りに大量に集まって来てくれました。キラキラの笑顔で手や腕・髪の毛を触ってきたり、カメラを向けると大はしゃぎしたり、とても可愛かったです。しかしそのような子どもたちでもマラリアに感染している子はとても多く、生徒の約半分が迅速検査で陽性の小学校もありました。マラリアの陽性率が低いところでは1割程度でしたが、それでも日本を代表とする他の先進国に比べてかなり高い現状で、マラリアの深刻さや先生方のプロジェクトの重大さを実感しました。

### 【現地の人々】

ケニアの人々は全土で話されるスワヒリ語と英語に加え、その地域の民族の言語も話すマルチリンガルです。私たちと会話するときは英語ですが、現地の人同士では滞在していた地域の言葉であるルオ語を使っていました。明るく陽気な人が多く、日本から来た私たちをみんな優しく迎え入れてくれたので、安心して毎日過ごせました。日本人と大きく異なるのが、パーソナルスペースがほぼゼロなところ。挨拶は握手やグータッチ・ハイタッチなどを交え、話すときや特に車に乗るときなど男性女性関係なく良い意味で全体的に距離が近いです。おそらく日本人のパーソナルスペースが広すぎるのですが、距離が近いだけで受け入れられている感じがして、私は心地よく思いました。



また現地の人は食べ物をシェアするというか、その場にある食べ物はみんなのものという認識なのかなと感じました。フィールドワーク中にお腹が空くので日本から持って行ったお菓子を食べていると、大人でもそれ何！食べたい！という感じで言われたり、お昼ご飯に食パンとジュースを配布されるので、ジャムを持参したら勝手に食べられて気づいたら無くなっていたり、飲みきれなかったジュースを小学生に渡したらビンごと回し飲んだり、日本では有り得ないことばかりで面白かったです。日本人の感覚が特殊なだけなのか気になります。

スクールサーベイで仲良くしていた現地の人。道端で買ったアボカドを切り分けてくれたことも。車内は基本この詰め込み具合で1〜3時間ガチで揺られる。

### 【ケニアを経験して】



ホテルの近くに住む姉妹。会うたびに喋ってくれて仲良くなった！

1か月の滞在を経て思ったのは、自分が恵まれ過ぎているということです。綺麗な水道やトイレがどこにでもあり、マラリアや他の病気の心配もなく過ごせて、大学卒業後の仕事も医師として何かしらあるという状況はまさにケニアでは、特に滞在していたような地方では極めて難しいことだと感じました。仲良くしていた現地の同い年くらいの人もマラリアにかかっていたり、大学を卒業後も雇用が無いために安定した仕事につけないと聞いたり、子どもたちが鉛筆1本でさえ欲しがってきたり、小学校の先生からマラリア以外の病気の調査もしてほしいと言われたり、あらゆる面で少し心が痛むような感情になりました。しかし大人も子どももみんな楽しそうに笑顔で生活しています。毎日が充実しており、貧困を感じさせないというか、パワフルに見えました。人々がみんな温かくて、年齢関係なく仲良く盛り上がり一緒に食事を楽しんだり、人同士の繋がりが日本より強く感じるのがとても好きなのところです。必ずまた行きたいと思うほど毎日楽しく、充実した1か月となりました。

